

セルビアと近隣諸国の地理・歴史教科書におけるセルビア人

The Serbs in Geography and History Textbooks in Serbia and Its Neighboring Countries

石田 信一

ISHIDA Shinichi

要旨

旧ユーゴスラヴィア諸国では学校教育制度の改革が進展し、そのカリキュラム・教育内容も大きく変化している。各国で教育内容が異なることは言うまでもなく、とくに歴史教科書においては特定の事件や人物等の評価をめぐって対立的な記述が目につき、それが紛争後の人々の和解の妨げとなっている面もある。その一例がユーゴスラヴィア各地に住むセルビア人の処遇をめぐる問題である。この問題はユーゴスラヴィア紛争の一つの焦点であり、現在でも解消されたとはいえない面がある。そこで、セルビアおよび近隣諸国の小学校向け地理・歴史教科書を参照しつつ、地理教科書の記述を中心に、そこに描かれたセルビア国外、とくに近隣諸国に在住するセルビア人に関する記述について分析を進めた。

現在のセルビアの地理教科書には「ディアスポラと地域のセルビア人」、すなわちセルビア国外のセルビア人に関する詳しい記述がある。もとより、歴史教科書においては現在のセルビアに限らず、広くセルビア人の歴史が描かれている。それはセルビア国外のセルビア人との結びつきを重視するセルビア政府の方針を反映している。一方、クロアチアの教科書におけるセルビア人に関する記述と比較すると、クロアチアの地理教科書にはセルビア人がほとんど描かれておらず、また歴史教科書では一九九〇年代の紛争における「反乱」の担い手として否定的に描かれる面があり、セルビアの教科書においてクロアチア人のセルビア人を被害者として位置づけているのは対照的である。さらに、クロアチア以外の近隣諸国の地理教科書においても、セルビア人に関する記述はほとんどなく、敵対的ではないまでも無関心であるように見える。学校教育の場において、紛争を通じ

て悪化した国民感情の克服に貢献できるような、いっそうの教科書改善の努力が必要であろう。

はじめに

ユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国の分裂・解体から三〇年が経過した現在、旧ユーゴスラヴィア諸国では学校教育制度の改革が進展し、そのカリキュラム・教育内容も大きく変化している。もともと、その中でもセルビアはクロアチアと並んで旧ユーゴスラヴィア連邦時代に標準的であった八年制の小学校（義務教育）を維持するとともに、各々のカリキュラムも連邦時代からの継承性が一定程度見られる。例えば、地理と歴史は小学校五年生から八年生まで必修であり、教科書がそれぞれ四分冊となっていることも、ともに連邦時代から変わらない。一方では、各国で教育内容が異なることは言うまでもなく、とくに歴史教科書においては特定の事件や人物等の評価をめぐって対立的な記述が目につき、それが紛争後の人々の和解の妨げとなってきた面もある¹⁾。

教科書制度に関して言えば、クロアチアをはじめとする他の旧ユーゴスラヴィア諸国からかなり遅れて、セルビアでは二〇〇〇年代後半に国定教科書から認可制の教科書制度に移行し、各教科書の記述内容にある程度の違いが生じるようになった。二〇二二～二二年度に使用されている小学校向けの教科書は、セルビアでは地理が各学年九～一一種類²⁾、歴史が各学年九～一〇種類³⁾となっており、他の旧ユーゴスラヴィア諸

国より多種多様である（同じレベルの日本の中学校向け地理教科書は四種類、同じく歴史教科書は七種類にとどまる⁴⁾）。なお、現行教科書は、セルビアでは二〇一八年度から二〇二二年度にかけて順次認可されたものである。

本稿では、セルビアおよび近隣諸国の小学校向け地理・歴史教科書を参照しつつ、そこに描かれたセルビア国外のセルビア人に関する記述について分析を進めていく。ユーゴスラヴィア各地に住むセルビア人の処遇をめぐる問題は、ユーゴスラヴィア紛争の一つの焦点であった⁵⁾。実際、まだ民族対立がさほど顕在化していなかった一九八一年に実施された国勢調査結果を見る限り、連邦構成共和国ごとのセルビア人の比率は、セルビア六六・四％、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ三三・〇％、クロアチア一一・六％、モンテネグロ三・三％、マケドニア二・三％、スロヴェニア二・二％であり、セルビア共和国以外の連邦構成共和国にもセルビア人が広く居住していたことがわかる⁶⁾。ユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国末期において、「セルビア・ナシヨナリズムの目標はセルビア共和国の自立性の強化や分離ではなく、共和国の外部に暮らすセルビア人をいかに結びつけるかであり、共和国の枠を超えたセルビア人の政治的連帯を目指すことから『大セルビア主義』と呼ばれることも多い⁷⁾とされる。同じ時期にクロアチアではボスニア・ヘルツェゴヴィナに住むクロアチア人やいわゆるディアスポラとの関係が強化されていったことと共通する面もある⁸⁾。後述するように、ユーゴスラヴィア紛争（クロアチア紛争、ボスニア紛争など）あるいはコソヴォ紛争を通じて、とく

にクロアチアやコソヴォのセルビア人は大幅に減少したが、なお一定規模のコミュニティを維持しており、その処遇が問題視されることも少なくない。

これまで、セルビアと近隣諸国の歴史教科書に関しては、かなりの数の研究成果の蓄積がある。それと比べて、地理教科書に関する研究は非常に限定的である。そこで、本稿では主として地理教科書の記述に着目し、近隣諸国の地理教科書と歴史教科書も参照しながら、クロアチアのセルビア人の事例を中心に、セルビア人の処遇をめぐる問題が学校教育にどのような形で反映されているのかを明らかにする一助としたい。また、紙幅の制約から、本稿では分析対象をいわゆるディアスポラのセルビア人全体ではなく、セルビアの近隣諸国に在住するセルビア人に関する記述に限定し、取り上げる事例も網羅的ではない。個々の事例やディアスポラ全体に関する、より詳細な分析を進めることを今後の課題としたい。

一・セルビアの教科書における「ディアスポラと地域のセルビア人」

現在のセルビアの歴史教科書はもとより、地理教科書においても、セルビア国外のセルビア人に関する記述が少なくない。これがセルビア政府の姿勢を反映したものであることは言うまでもない。

クロアチアをはじめとする旧ユーゴスラヴィア諸国では、すでに一九九〇年代初頭から外国に住む自国民あるいは自国からの移民に関する

る条文を盛り込んでいたが、これに倣ってか、二〇〇六年に公布された現在のセルビア共和国憲法は、セルビア共和国が外国にいるセルビア国民の権利と利益を保護し、外国で暮らすセルビア人と祖国との関係を発展させると規定している（第一三条）。二〇〇九年に施行された「ディアスポラと地域のセルビア人に関する法律」によれば、ディアスポラは「外国に住むセルビア共和国の国民」および「セルビア共和国および地域（region）からの移民であるセルビア民族に帰属する者およびその子孫」¹⁰と定義されている。また、「地域のセルビア人」は「スロヴェニア共和国、クロアチア共和国、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、モンテネグロ、マケドニア共和国、ルーマニア、アルバニア共和国、ハンガリー共和国に住むセルビア民族に帰属する者」とされており、近隣諸国のうちブルガリア共和国が含まれていない。二〇一一年に採択された「祖国とディアスポラおよび祖国と地域のセルビア人の関係の維持・強化に関する戦略」¹¹においても、この定義が援用されている。一方では、セルビアには二〇一二年まではディアスポラ省（二〇一一年から一二年まではディアスポラ・宗教省）があつたが、大がかりな省庁再編による統廃合を経て、現在ではセルビア国外のセルビア人に関する事項は外務省の「ディアスポラと地域のセルビア人」との協力のための部局の管轄となっている¹²。彼らを組織化するため、各国のセルビア人代表による「ディアスポラと地域のセルビア人議会」が設けられているほか¹³、セルビア共和国議会（国民議会）には「ディアスポラと地域のセルビア人」委員会がある¹⁴。

こうした背景から、すでに二〇〇六年に制定された学習指導要領に相当するプログラムにおいて、小学校八年生の地理に「我が国の外のセルビア人」という小項目が設けられ¹⁵、実際の地理教科書では、例えば教科書局とクレットのものには「セルビア国外のセルビア人」¹⁶という章が、またフレスカのものには「離散するセルビア人」¹⁷という章が設けられていた。その後、二〇一九年に改訂された現在のプログラムでは、これが拡充され、小学校八年生の地理に「地域とディアスポラのセルビア人」という大項目が設けられた。その内容は「モンテネグロのセルビア人、ボスニア・ヘルツェゴヴィナのセルビア人」スルブスカ共和国、クロアチア人のセルビア人、その他の近隣諸国のセルビア人、ディアスポラのセルビア人」とされている¹⁸。

このプログラムに基づき、二〇二一年に認可・発行された現在のセルビアの小学校八年向け地理教科書には、必ず「地域とディアスポラのセルビア人」という章が設けられている。もともと、教科書によってその描き方は多様であり、とくに「ディアスポラのセルビア人」で取り上げる国や地域にはばらつきがある。各教科書が「地域とディアスポラのセルビア人」に割いている分量も出版社によって大きく異なり、BIG Zは一三頁¹⁹、データ・スタトウスは一六頁²⁰、エドゥカは一一頁²¹、ゲルンディウムは一〇頁²²、クレットは一二頁²³、クレアティヴニ・ツェンタルは一九頁²⁴、ノヴィ・ロゴスは一〇頁²⁵、ヴルカンは六頁²⁶、教科書局²⁷は七頁となっている（扉や練習問題を含む）。また、教科書における「地域のセルビア人」の範囲は前述の「ディアスポラと地域のセルビア

人に関する法律」のものとは一致せず、多くの教科書がブルガリアのセルビア人についても取り上げている²⁸。

クレットの地理教科書では「歴史的事件や経済状況から数多くのセルビア人が自らの祖国の外で、すなわちディアスポラあるいは離散の中で暮らすこととなった」としつつ、ディアスポラには「外国で暮らすセルビア共和国のすべての国民を含む」²⁹とされている。また、「モンテネグロとスルブスカ共和国のセルビア人にはセルビアで無償の学校教育および病院での治療を受ける権利がある。地域の、二重国籍を持つすべてのセルビア人には、セルビア共和国での就労の権利がある」³⁰といった補足的な説明もある。

小学校八年向けの歴史教科書は第一次世界大戦後の歴史を取り扱うため、ユーゴスラヴィアという国家の枠組みにおいて必然的に現在のセルビアの国外のセルビア人の動向についても触れることになるが、とくに「ディアスポラと地域のセルビア人」という項目を設けているものがある。ここでは、まずクレットの教科書の一節を引用する。

セルビア共和国の国外に三〇〇万人から四〇〇万人のディアスポラが暮らしていると推計される。かなりの数のセルビア人が祖国の外に暮らすに至った理由はいくつもある。過去にも現在にも経済的理由があり、政治的な争いや内部分裂、戦争、国境の変更（ユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国の崩壊と、それによりセルビア人が旧ユーゴスラヴィアの各共和国で少数民族になったこと）などであ

る。ユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国の崩壊によって、国外に暮らすセルビア人の数は増加し、このカテゴリーの住民を「地域のセルビア人」と呼ぶようになった。セルビア人が世界中に離散しはじめた頃から現在まで、セルビア正教会はディアスポラのセルビア人コミュニティが民族的アイデンティティを維持する上で重要な役割を演じてきた。二〇世紀を通じて、正教会は祖国とディアスポラを結びつける重要な組織であった。現在セルビア共和国が抱える最大の問題の一つが、高度の教育を受けた人々の国外移住である。移行期国家でありヨーロッパ連合の加盟候補国であるセルビアにとって、ディアスポラの役割は非常に大きな意味を持つ。ディアスポラの経済的・文化的結びつき、彼らのヨーロッパ連合諸国やその他の西側諸国における労働や暮らしの知識と経験は、セルビア共和国のヨーロッパ連合への近道に大きく貢献できる³¹。

また、ヴルカンの歴史教科書には、各国におけるセルビア人の法的地位を含めて、以下の概略的な記述がある。

セルビア人ディアスポラは数多いが、どのくらいのセルビア人が国を去ったのか正確には特定できない。数多くのセルビア国籍を持つディアスポラは主として二〇世紀を通じて非常に頻繁に見られた移民の結果である。人々は経済的・政治的理由、この国での戦争や政治的大変動のため、セルビアを去った。

国際移住機関の二〇〇八年のデータによれば、四二〇万人から五八〇万人のセルビア人あるいはその子孫がディアスポラとなっている。

セルビア国外でもっとも数多くのセルビア人が暮らしているのは旧ユーゴスラヴィアの諸共和国である。ボスニア・ヘルツェゴヴィナではセルビア人は主要構成民族の地位を得ている。クロアチアと北マケドニアでは彼らは少数民族であるが、スロヴェニアでは住民の二%を構成しているにもかかわらず少数民族としての権利を奪われている。モンテネグロでは二番目に数の多い民族であるセルビア人の地位は法的に規定されていない³²。

なお、セルビアはコソヴォの独立を認めておらず、依然としてセルビアの中のコソヴォ・メトヒヤ自治州として位置づけているため、コソヴォのセルビア人に関する記述は少ない。例えば、教科書局の地理教科書では「二〇〇八年にコソヴォはセルビア国家からの独立を宣言したが、この独立をセルビアは認めなかった。世界中の一定数の国々がコソヴォを独立国として承認したが、かなりの数の国々がそうではなかった。近年、この自称国家の承認を撤回する国々が増えている」とされている。これに加えて、「コソヴォ・メトヒヤか単にコソヴォか？」というコラムで「コソヴォ・メトヒヤ地方は現在では自称国家の名称によって世界中からコソヴォという名称で呼ばれているが、それは誤りである。このセルビアの自治州は二つの部分、すなわち二つの盆地、コソヴォ盆地とメト

ヒヤ盆地からなり、コソヴォ・メトヒヤ地方の名称こそが正当なものである」³⁴といった説明がある。一方、クレットの地理教科書では「二〇〇八年二月にコソヴォ・メトヒヤの独立が一方的に宣言されたが、この決議を世界中の数多くの国々が非難している。その際に自称コソヴォ共和国が樹立されたが、セルビア共和国はこれを認めていない」³⁵と、より簡潔に説明されている。また、どの歴史教科書でも、コソヴォ紛争の詳しい経緯とともに、その一方的な独立宣言を非難する記述が見られる。もっとも、コソヴォではユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国時代から独自の教科書が出版されており、現在でもセルビアとはまったく別の教科書が用いられている。それらの地理・歴史教科書では、コソヴォが独立したものと記述されていることは言うまでもない。³⁶

二. クロアチアのセルビア人

二〇一一年の国勢調査結果によれば³⁷、クロアチアには総人口の四・三六%、一八万六六三三人のセルビア人が居住している。もともと、旧ユーゴスラヴィア連邦時代末期の一九九一年の国勢調査では³⁸、総人口の一・二一六%、五八万二六六三人のセルビア人が居住しており、一九九〇年代の紛争を通じて大きな人口変動があったことがわかる。クロアチアにおけるセルビア人問題と彼らを含むマイノリティの処遇等をめぐっては、日本でもすぐれた研究成果がある³⁹。

クレットの地理教科書では、次のように紹介されている。「ユーゴス

ラヴィア社会主義連邦共和国崩壊前、クロアチアの領土に約六〇万人のセルビア人が暮らしていた。一九九一年から九五年にかけての時期に、セルビア人住民が住んでいた諸地方にクニンを行政上の中心地としてクライナ・セルビア人共和国が形成された。この地域におけるセルビア人住民の迫害は一九九五年五月の軍と警察による「稲妻」作戦で始まり、九五年八月の軍による「嵐」作戦後にも生じた。クライナ・セルビア人共和国は消滅した。前述の軍事作戦を通じて、数多くのセルビア人がスラヴォニア、リカ、コルドウンその他のクライナを構成していた諸地方から追放された」⁴⁰。この教科書の同じ頁には、「嵐」作戦後にクロアチアから脱出するセルビア人難民の写真が掲載されている。さらに、「現在、クロアチアには約一八万六〇〇〇人のセルビア人が、主としてスラヴォニアとバラニャに暮らしている。ユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国崩壊後、セルビア人から主要構成民族としての地位が奪われ、現在彼らはクロアチアにおける最大の少数民族となっている（総人口の四・四%）」⁴¹という説明が続いている。

また、ノヴィ・ロゴスの地理教科書では、詳しい歴史的背景とあわせて、次のように紹介されている。同じ頁には、かつての軍政国境地帯の地図とセルビア正教会のクルカ修道院などの写真が掲載されている。

クロアチアには二〇一一年の国勢調査ではこの国の全住民の四・三六%にあたる約一八万六〇〇〇人のセルビア民族の構成員が暮らしていた。ビザンツ皇帝コンスタンティノス七世ポルフュロゲネト

ス（九四四～九五九年）によれば、セルビア人の一族であるコナヴレ人、ザフムリエ人、ネレトヴァ人がすでに七世紀からコナヴレからツェティナ川の河口までの地域に広がっていた。セルビア人はオーストリア帝国の一部である軍政国境地帯における国境兵であり、ヴェネツィア共和国時代のダルマチアでも同様であった。クロアチアにおけるセルビア人の総数は、総人口の二・二％にあたる約五八万一〇〇〇人ほどであった一九九一年の国勢調査と比べて減少している。クロアチアにおけるセルビア人の減少には、かつてのユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国の領域における紛争（一九九一～九五五年）が影響を及ぼした。セルビア人が暮らしていた諸地方には、紛争中に「クライナ・セルビア人共和国」が創設されたが、一九九五年に消滅し、二五万人以上のセルビア人がこの地域を逃れた。クロアチアにおけるセルビア人の多くが現在ではザグレブ、パニヤ、コルドウン、リカ、北ダルマチア、スラヴォニア、西スレム、バラニヤに暮らしている。より少数のセルビア人は南ダルマチア、ピロゴラ、モスラヴィナ、ゴルスキ・コタル、イストリアに暮らしている⁴⁰。

クレアティヴニ・ツェンタルの地理教科書には、全般的に各国のセルビア人に関する詳しい記述がある。かなりの程度、ノヴィ・ロゴスのものと重複するが、ここでは「クロアチアのセルビア人」の冒頭部分を用する。

現在のクロアチア共和国の特定の地方（コナヴレからツェティナ川のアドリア海への出口に至る地域）に、セルビア民族は中世初期から存在していた。これに関しては、一〇世紀のビザンツ皇帝コンスタンティノス七世ポルフュロゲネトスの文書が証明している。のちに、この地方はネマニッチ朝のセルビア国家に編入された。トルコのバルカン半島への侵攻によって、そして古いセルビア系国家の征服によって、セルビア人はバルカン半島の西側と北側の境界に向かって押し出された。ハプスブルク帝国南部の国境地帯（軍政国境地帯）では、セルビア人は国境兵、すなわち彼らが暮らす土地を所有する見返りにこの国の南側の国境をトルコから守る兵士としての役割を演じた。これと似た役割を、ヴェネツィア共和国の支配下にあったダルマチアのセルビア人も果たした。二〇世紀初頭から現在まで、セルビア人は現在のクロアチア共和国の国境地帯に住む人口第二位の集団である。激動の政治的争いと悲劇的な戦争によって、彼らの数はつねに減少してきた。現在のクロアチア領における国勢調査結果によれば、総人口に占めるセルビア人の比率がもともと高かったのは一九二二年（二二・一％）、もともと低かったのは二〇一一年（四・三六％）であった。一九九一年から二〇一一年までの時期だけでも、クロアチアにおけるセルビア人の数は約四〇万人も減少した。セルビア人が彼らの長年にわたるクロアチアにおける故郷からいなくなった主な原因は同化（多数派であるクロアチア人との関係におけるセルビア人の従属的な地位のため）、第二次世

界大戦中のウスタシヤによるジェノサイド、そして一九九五年に行われた軍事作戦「嵐」を通じた彼らの強制的な追放である。クロアチアからの難民・避難民のもつとも多くがセルビアとスルブスカ共和国に、そのほかヨーロッパや世界の数多くの国々に移住している⁴³。

前述の通り、セルビアの歴史教科書では、クロアチアのセルビア人に関する記述も少なくない。そもそも、小学校六年生で扱う近世史では、セルビア人がハプスブルク支配下の軍政国境地帯やヴェネツィア支配下のダルマチアなどに住んでいたため、必ず触れられることになり、また小学校七年生で扱う近代史ではハプスブルク支配下のクロアチア、スラヴォニア、ダルマチアのセルビア人が取り上げられている。小学校八年生で扱う現代史では、とくに第二次世界大戦中の「クロアチア独立国」におけるセルビア人の処遇と一九九〇年代のクロアチア独立と関連したセルビア人の動向について、非常に詳しい記述がある。それは、どの歴史教科書でも強調され、クロアチアの歴史教科書との不一致がしばしば指摘される部分でもある。ここでは、やや長くなるが、BIGZの小学校八年生向けの教科書の記述を、その一例として引用する。

クロアチア独立国の領土では、セルビア人、ユダヤ人、ロマに対するジェノサイドが行われた。

人種主義的イデオロギーにあわせて、またヒトラーのドイツに

従って、ウスタシヤはセルビア人、ユダヤ人、ロマの大規模な殺害に着手した。セルビア人の迫害と殺害はすでに一九四一年四月に始まっており、終戦まで続いた。ウスタシヤ政権の計画は、セルビア人の三分の一を殺害し、三分の一をローマ・カトリック信仰に改宗させ、三分の一を追放しようとするものであった。

クロアチア独立国が創設されるとすぐに、セルビア人は法律の適用外とされた。職場から解雇され、彼らの財産も奪われた。キリル文字は禁止され、左腕には自らの信仰を示す記号をのせた白い腕章をつけなければならなくなった。それ以外にも、大量逮捕・殺害の形で物理的な迫害が続いた。特別収容所が設置されたが、その中で最も有名なのがヤセノヴァツであり、そこで収容者はもつとも残忍な方法で殺された。その大半はセルビア人であり、そのほかにユダヤ人、ロマ、そしてクロアチア人の反ファシストやウスタシヤ政権の反対者もいた。ゴスピッチ・ヤドヴノ・パグの収容所の複合体も大規模な処刑場であった。ジャコヴォ、スタラ・グラディシユカ、その他の場所でも大規模な殺害が行われた。ヤストレバルスコには子どもの収容所が存在したが、それは占領下のヨーロッパで唯一の施設であった。学問的には、ローマ・カトリック信仰への改宗は二〇万人以上が行い、クロアチア独立国の領土から占領下のセルビアに約四〇万人のセルビア人が逃れたとされる。

ウスタシヤは迫害をセルビア正教会に対しても行った。かなりの数の教会と修道院が破壊され、正教会の聖職者が犠牲となった⁴⁴。

クロアチアでは一九九〇年末に憲法改正が行われ、クロアチアはクロアチア民族の国家であると規定された。クロアチアのセルビア人は主要構成民族としての地位を失い、少数民族であると宣言された。クロアチアのセルビア人はこの変更およびセルビア語・キリル文字の地位に不満を抱き、脅かされていると感じた。政治的には、セルビア民主党が結成され、セルビア民族がクロアチア国内で自治を獲得することを求めた。

クロアチアの独立が一九九一年六月二五日に宣言された。エスニックな緊張状態と偶発的事件が、クロアチア人とセルビア人の間の、そして独立したクロアチア軍とユーゴスラヴィア人民軍（JNA）との間の大規模な武力紛争に発展した。セルビア人は一九九一年一月に彼らが多数派として暮らしていた諸地域でクニンを中心地とするクライナ・セルビア人共和国の設立を宣言した。

一九九二年初頭、ヨーロッパ共同体はクロアチアの独立を承認した。その後、JNAはクロアチアおよびクライナ・セルビア人共和国の領土から撤退し、国連平和軍（UNPROFOR）が展開された。彼らは一時的に平和をもたらすことに成功したが、それにもかかわらず紛争は継続した。国連は一九九二年五月にクロアチアを独立国として承認した。

クロアチア軍は一九九五年に「稲妻」作戦と「嵐」作戦を実行し、国連軍の保護下にあったクライナ・セルビア人共和国の領土の大半を奪取した。東スラヴォニアは形式的には一九九八年にクロアチア

に編入された。

クロアチアにおける戦争で一万七〇〇人以上の人々が亡くなったと見積もられており、その中にはかなりの数の一般市民も含まれていた。甚大な物的破壊もたらされた。セルビア人の大半が、なかでも約二五万人が「稲妻」作戦と「嵐」作戦のちにクロアチアから逃れた。これらの作戦中・作戦後にセルビア人の一般市民に対する犯罪が行われ、数多くの逃れたセルビア人の家屋が焼き払われた。⁴⁵

なお、これとは別に、クレットの歴史教科書には、ユーゴスラヴィア紛争（とくにクロアチア紛争）の詳しい紹介とともに、クロアチア在住セルビア人に関するまとまった記述がある。

一九九一年から九五年にかけての戦争中のクロアチアにおけるセルビア人の反乱は、さまざまな形で示される。クロアチア政府はクロアチアにおけるセルビア人の政治的な、そして武力による抵抗を、もっぱらセルビアから押しつけられたものとみなした。スロボダン・ミロシエヴィチの政治体制はユーゴスラヴィア人民軍の支持を得て大セルビアの創設をめざすものとされた。クロアチアにおけるセルビア人住民は国家の崩壊とナシヨナリズムの高揚という条件の下で、安全だと感じるができなかった。彼らのクロアチア政府に対する正当な恐怖心は、もっぱらセルビアから押しつけられた

緊張状態であるとみなされた。その一方で、セルビア政府はクロアチアにおけるセルビア民族の全面的危機というテーゼを唱え、しばしば一九九〇年の新たなクロアチア憲法におけるセルビア人に対する差別的な関係を引き合いに出し、さらに第二次世界大戦中にクロアチア独立国で遂行されたセルビア民族に対するジェノサイドの経緯を思い起こさせた⁴⁶。

一九九一年の国勢調査によれば、当時のクロアチア社会主義共和国には五八万人を超えるセルビア民族への帰属を表明した市民が暮らしていた。同じ国勢調査で、セルビア人はクロアチアの全住民の一二・二%を占めた。二〇〇一年の国勢調査によれば、クロアチア共和国には約二〇万人のセルビア人が暮らしていた。現在、セルビア人はクロアチア共和国市民の5%にも満たない。戦争中にクロアチア領から避難したセルビア人の大半は、セルビア共和国あるいはスルプスカ共和国に移り住んだ。現在まで、クロアチアに帰還したのは戦争前の住民の少数だけである⁴⁷。

一方、現在のクロアチアの地理カリキュラムには、クロアチア在住のセルビア人に関する独自の項目はない⁴⁸。そのため、例えばシユコルスカ・クニガの地理教科書でも、「ある国における少数民族の権利の保障は、その国の自由、権利、民主主義の尺度の一つである。少数民族は国際的規範とクロアチア共和国憲法に則り、その独自性を保持する権利、そして自らの言語と文字による教育や行政機関への代表参加を含むその他の

権利を保障されている」ことを前提としつつ⁴⁹、「クロアチアにおける最大の少数民族はセルビア人(四・四%)であり、数が多い順にボシュニャク人、アルバニア人、イタリア人(イストリアにもっとも多い)、ロマ、ハンガリー人(バラニャにもっとも多い)、スロヴェニア人、チェコ人(ダルヴァル周辺)、モンテネグロ人、スロヴァキア人、マケドニア人、その他となっている」⁵⁰と述べていることを除けば、セルビア人に関する記述は見られない。そもそも、セルビアは南東ヨーロッパ諸国の一部として所々に登場するだけであり⁵¹、他の国々と比べても記述は多くない。

これとは異なり、クロアチアの歴史カリキュラムには一九九〇年代のユーゴスラヴィア紛争に関連して、依然として「大セルビア的侵略(Velikosrpska agresija)」という項目があり⁵²、とくに近現代史を取り扱う歴史教科書ではセルビアおよびクロアチア在住のセルビア人に対して否定的な記述が見られる。第二次世界大戦中の「クロアチア独立国」におけるセルビア人の処遇とあわせて、シユコルスカ・クニガの小学校八年生向けの歴史教科書の記述を引用する。なお、クロアチアが公式に「祖国戦争」と呼ぶクロアチア紛争に関しては、どの教科書にも非常に詳しい記述が見られるが、ここではそのごく一部のみを取り上げることにする。

ウスタシャ指導部の狙いは、民族的に純粋なクロアチア国家の創設であった。ウスタシャのテロの攻撃を受けたのは、セルビア人、ユダヤ人、ロマであった。セルビア人に対するウスタシャの政策に

は残忍な方法が用いられた。国外退去（強制移住）、カトリックへの改宗、強制的な収容所への連れ去り、物理的な根絶である。セルビア人住民に対するウスタシヤのテロは、かなりの数のセルビア人が「森」に逃れる原因となった。彼らの一部はパルチザンに、一部はチエトニクに加わった。（中略）

ウスタシヤの収容所で殺された人々の正確な数を特定するのは非常に困難であり、歴史家の間でも一致していない。最大のウスタシヤの収容所であるヤセノヴァツでは、八万三二四五人の犠牲者が特定されている。一人の人間が違う民族あるいは宗教というだけの理由で殺されるのは、それだけでも恐ろしいことだが、セルビアの一部の歴史家は殺された人々の数を増やすことで犯された犯罪がより恐ろしいものに見えると考えた。彼らの中にはヤセノヴァツで一〇〇万人のセルビア人が殺されたと説明する者もいる。一方、クロアチア側では、犠牲者の数を減らしたり、収容所ではいかなる犯罪も起こらず、自然死した者が唯一の犠牲者であったと断定する者もいたのである⁵³。

一九九一年二月、クニン地域のセルビア人住民の大半がクロアチア共和国からの分離と「クライナ・セルビア人自治区」の創設を宣言した。同じことがリカ、コルドウン、スラヴォニア各地で続き、これらの地域はクロアチア政府の管理下から外れてしまった。重要なことを指摘するなら、反乱を起こしたのはクロアチアのセルビア

人の一部だけであった。多くのセルビア人は受動的な傍観者であった、その多くが「自治区」以外のクロアチアの他の地域に暮らしていた。セルビア人の一部は、クロアチア側に立って積極的に戦った。

反乱はいくつかの要因がもたらした結果であった。当時、崩壊した国家における権力のテコであったミロシエヴィチとユーゴスラヴィア人民軍は、クロアチアが自らの領土全域とともに独立することを認めるつもりはなく、セルビア人の「自治区」を分離させることを計画した。セルビア民族主義者は当時、大セルビア設立構想を唱えており、その西端はヴィロヴィティツァからカルロヴァツを経てカルロバグに延びていた。（第二次世界大戦期のチエトニクのイデオロギーを思い出そう。）それによってすべてのセルビア人を一つの国に統合することを望んだのである。セルビアのメディアとセルビアからの扇動者たちはクロアチア共和国がウスタシヤのクロアチア独立国とますます似通ってきており、クロアチアのセルビア人を新たな迫害で脅かしていると主張した。このプロパガンダの成功には、節度を欠いた声明を通じてクロアチアの政治家も貢献し、ベオグラードが望んだように、セルビア人住民が住むクロアチアの諸地域で反クロアチアの気運が高まった。一九九一年末、反乱者たちはクロアチア共和国からの分離を宣言し、クニンを首都とするクライナ・セルビア人共和国を設立した⁵⁴。

なお、この教科書はクロアチア紛争終結後にセルビア人が置かれた状

況について、『嵐』作戦中にクライナ・セルビア人共和国政府は組織的にセルビア人住民の避難を開始した。敗戦後、占領地にいたほぼすべてのセルビア人住民がクロアチアを去った。『嵐』作戦の終了間際あるいは終了後に、解放された地域ではセルビア人一般市民の殺害が行われた。彼らは主として故郷を離れようとしなかった、いかなる脅威ともならない高齢者であった。避難したセルビア人の財産が略奪され破壊された⁵⁵と述べつつ、「セルビア人の反乱勢力とユーゴスラヴィア人民軍が行った民族浄化政策によってクロアチア各地の民族構成は大きく変わったが、『嵐』作戦後はセルビア人住民の大半が退去したために国全体の民族構成が変化した。一九九六年には三二万四六八九人のクロアチア共和国からのセルビア人避難民が登録されていた⁵⁶と説明している。前述のセルビアの歴史教科書とは異なる視点での記述となっていることがわかる。

三. その他の「地域のセルビア人」(一)

続いて、クロアチア以外の「地域のセルビア人」、すなわちスロヴェニア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、モンテネグロ、北マケドニア、ルーマニア、アルバニア、ハンガリーに加えて、多くの地理教科書が取り上げているブルガリアのセルビア人について、クレットの地理教科書の記述を中心に概観していく。

(二) スロヴェニア

スロヴェニアは旧ユーゴスラヴィア諸国の中でもセルビアと国境を接していない唯一の例外である。一九九一年にクロアチアと同時に独立宣言を行った際、いち早く独立が認められたのは「セルビア人問題」がなかったからだとも言われていた。とはいえ、スロヴェニアにセルビア人が居住していないわけではなく、それぞれどこか最大の少数民族となっている。スロヴェニアで民族を調査項目に含む国勢調査が最後に実施されたのは二〇〇二年であり、実情を反映しているかは判然としないが、それによれば総人口の一・九八%、三万八九六四人のセルビア人が居住していたのである⁵⁷。しかも、彼らは土着の少数民族とみなされたイタリア人やハンガリーと同じような権利が与えられたわけではなく、このことは大きな問題として指摘されてきた。

クレットの地理教科書では、次のように紹介されている。「スロヴェニアには、この国の総人口の約二%にあたる約四万人のセルビア人が暮らしている。クロアチアと同じく、この国でもセルビア人は主要構成民族としての地位を奪われ、しかもスロヴェニアではセルビア人は少数民族としての権利さえ持たない。この地域に、彼らは主としてユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国時代に経済的理由で移り住んだ⁵⁸。また、補足的に「スロヴェニア南東部のベラ・クライナ地方には一六世紀からオスマン帝国を逃れてきたウスコクと呼ばれるセルビア人住民が住んでいた。現在ではこの地方のいくつかの村（マリンドル、ポヤンツイ、パウノヴィチほか）にウスコクの末裔であるセルビア人住民が暮らしている」

⁵⁹という説明も加えられている。このほかの地理教科書でも、ベラ・クライナにおける伝統的なセルビア人コミュニティの存在とユーゴスラヴィア連邦時代の経済的理由による移住に加えて、スロヴェニアのセルビア人に少数民族としての地位さえ与えられていないことに対する批判的な記述が目につく。

なお、スロヴェニアの小学校向けの地理教科書でも歴史教科書でもスロヴェニアのセルビア人が登場することはほとんどない(イタリア、オーストリア、ハンガリーに住むスロヴェニア人に関する記述はある)。

(二) ボスニア・ヘルツェゴヴィナ

ボスニア・ヘルツェゴヴィナでは、一九九五年の Dayton 合意に基づき、セルビア人はボシュニャク人、クロアチア人と並ぶ主要構成民族 (constituent peoples) として位置づけられている⁶⁰。二〇一三年の国勢調査結果によれば⁶¹、ボスニア・ヘルツェゴヴィナには総人口の三〇・七八%、一〇八万六七三三人のセルビア人が居住している。

クレットの地理教科書では、次のように紹介されている。「地域のすべての国の中でもっとも数多くの、約一一〇万人のセルビア人住民が、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの領土に住んでいる。この国では、セルビア人は各エンティティに均等に分布しているわけではなく、スルプスカ共和国の領土にはるかに多く、その多数派、約八五%を住んでいる。数多くのセルビア人がボスニア・ヘルツェゴヴィナ連邦とクロアチアで迫害を受けてスルプスカ共和国の領土に移住してきた。セルビア人が住民

の多数派を占める都市として、バニャ・ルカ、ムルコニチ・グラード、ビエリナ、プリエドル、フォチャ、ブレチャ、トレビニエがある。ボシュニャク人とクロアチア人と並んで、ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおいてセルビア人は主要構成民族とされており、一つの国家の領土全体を分け合っている⁶²。このほか、多くの地理教科書が「地域のセルビア人」のうちボスニア・ヘルツェゴヴィナのセルビア人(およびスルプスカ共和国の紹介)にもっとも多くの分量を割いている。歴史教科書の場合、一九九二年から九五年までのボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける戦争に関して詳しい記述があり、一九九五年にスレブレニツァで起こったセルビア人勢力によるボシュニャク人に対するジェノサイドについても触れられている。

一方、セルビア人が主要構成民族の一つとなっているボスニア・ヘルツェゴヴィナでは、とくに歴史教科書では必然的にボスニア在住セルビア人が登場する頻度は高い。一方、地理教科書の場合、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ連邦で認可されているものでは、セルビア人についてはほとんど触れられていないものの、スルプスカ共和国の教科書(教科書・教材局による国定教科書)には、スルプスカ共和国の成り立ちに関する詳しい説明に加えて、「先頃の戦争(一九九二年〜九五年)とその結果がボスニア・ヘルツェゴヴィナの住民全体を劣化させ、迅速な移民プロセスを条件づけ、民族構成を混乱させた。さまざまな民族からなる戦前の住民の多くが、たえずその地域を離れて国外に去っていった。大規模な国内の移動が民族的に均質な(単一民族、単一宗教の)領土を作り上

げた。スルブスカ共和国から避難または移住していった住民の約八〇％がボシュニャク民族あるいはクロアチア民族であった。同時に、スルブスカ共和国に移住してきた住民の九〇％以上がクロアチア共和国とボスニア・ヘルツェゴヴィナ連邦から逃れ、移住してきたセルビア人であった」⁶³といった記述がある。

なお、現在のクロアチアの地理カリキュラムには、クロアチア在住のセルビア人に関する独自の項目が設けられていない反面、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの独自性に関する項目があり、そこでボスニア在住のセルビア人について触れられることがある⁶⁴。例えば、シュコルスカ・クニガの地理教科書では、「ボスニア在住のセルビア人はユーゴスラヴィア人民軍とセルビアの支援を得て、ボスニアの独立宣言を受け入れず、大セルビア的侵略が始まった。∴自称スルブスカ共和国の領土ではボシュニャク人とクロアチア人に対する民族浄化が遂行された」⁶⁵といったセルビアおよびセルビア人に否定的な記述も見られる。同じシュコルスカ・クニガの歴史教科書でも、「一九九二年四月、セルビア人勢力がボスニア・ヘルツェゴヴィナへの侵略を開始した。クロアチアと同じく、セルビア人の反乱者をJNAとセルビアからの準軍事組織が支援した。∴ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける一九九二年から九五五年までの戦争で一五万人以上の人々が亡くなった。セルビア人勢力は占領地でクロアチア人とボシュニャク人住民の政治的迫害を行った」⁶⁶といった記述が見られ、基本的な立場は変わらない。

(三) モンテネグロ

モンテネグロはセルビアをアドリア海へと結ぶ重要な隣国であり、一九九一年にユーゴスラヴィア紛争が勃発した際にはセルビアと行動をともにし、一九九二年にはユーゴスラヴィア連邦共和国（新ユーゴスラヴィア）を結成したが、二〇〇三年には連合国家セルビア・モンテネグロに再編し、二〇〇六年にその解消によって独立を達成した。二〇一一年の国勢調査結果によれば⁶⁷、モンテネグロには総人口の二八・七三％、一七万八一一〇人のセルビア人が居住している。クレットの地理教科書では、次のように紹介されている。「モンテネグロの領土には、数多くのセルビア人が暮らしている。その理由は、この二つの国が二〇〇六年まで連合を形成していたからである。この国には総人口の約三〇％にあたる約一七万八〇〇〇人のセルビア人が住んでいると推計される。セルビア人は主として北部の山岳地帯に住んでいる。彼らが多も多い自治体はアンドリイェヴィツァ、プリエヴリヤ、ジャブリヤク、コラシン、ペラネ、ビエロ・ポリーエであるが、セルビア人住民が相対の比率を占める沿海地方の都市としてティヴァトとヘルツェグ・ノヴィがある」⁶⁸。どの地理教科書でもモンテネグロのセルビア人に関する記述がある一方、歴史教科書ではモンテネグロのセルビア人に関する記述は見られない。

また、モンテネグロの小学校向けの地理教科書でも歴史教科書でも、モンテネグロのセルビア人が登場することはほとんどない。

(四) 北マケドニア

北マケドニアは一九九一年にマケドニア共和国として独立し、ギリシアとの国名論争により国際的にはマケドニア旧ユーゴスラヴィア共和国を名乗りつつ、二〇一九年にギリシアとの合意で北マケドニア共和国に改称した国である。北マケドニアで民族を調査項目に含む国勢調査が最後に実施されたのは二〇〇二年であり、それによれば総人口の一・七八%、三万五九三九人のセルビア人が居住していた⁶⁹⁾。

クレットの地理教科書では、次のように紹介されている。「北マケドニアには約三万六〇〇〇人のセルビア人が住んでいる。この国ではセルビア人は少数民族であると宣言されているが、セルビア語を公用語とする権利を得ているのは、この国の北部の三つの自治体（スタロ・ナゴリチャネ、タバノフツェ、クチュヴィシユテ）だけである。同じように、教会の分裂（マケドニア正教会のセルビア正教会からの分離）の結果、セルビア正教会の信徒は信教の自由とセルビア人の教会に対する財産権を失っている」⁷⁰⁾。「ミルティン王、ステファン・デチャンスキ王、もしくはドウシヤン帝、ウロシユ帝の治世には、スコピエは中世セルビア国家の首都であった。それは中世を通じて現在の北マケドニアの領土に土着の民族としてセルビア人が住んでいたことを意味する」⁷¹⁾。データ・スタトゥスの地理教科書には、北マケドニア在住セルビア人に関する、より詳しい記述があるが、ここでは省略する。セルビアの歴史教科書には、北マケドニアのセルビア人に関する記述はまったく見られない。一方、北マケドニアの最新の小学校向けの地理教科書における北マケドニアの

セルビア人に関する記述については、現時点では確認できていない（中学校向けの地理教科書には、彼らの人口と居住地域に関する記述がある）⁷²⁾。

四. その他の「地域のセルビア人」(二)

これまでに取り上げた旧ユーゴスラヴィアの国々に加えて、アルバニア、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリアも、セルビアの地理教科書では「地域のセルビア人」の対象となる国々である。それらの国々での扱いは現時点では確認が困難であり、別稿に譲ることとし、セルビアの地理教科書での記述を紹介するとどめる。

(一) アルバニア

アルバニアにおけるセルビア人の実態については不明な部分が多い。二〇一一年の国勢調査において、セルビア人には自らの民族的帰属を回答する選択肢がなく（「モンテネグロ人」という選択肢はある）、統計上は確認ができない⁷³⁾。

クレットの地理教科書では、次のように紹介されている。「アルバニアには約三万人のセルビア人が暮らしていると推計される。その多くがスカダル湖周辺に住んでいる。もつとも、多くのセルビア人は自らの姓名を変えることを強いられた。現在、一定の補償金を支払えばアルバニア化された苗字か名前を変えることができるが、姓名の両方は不可能と

なっている」⁷⁴。「アルバニアの領土に少数民族が存在することを防ぐため、国王ゾグは一九三〇年代にアルバニア的でないすべての姓名の使用を禁止した。この法令に違反した者は禁固刑に処せられた。一九六〇年代からアルバニア人ではない住民はテレビ局やラジオ局を通じた母国とのコンタクトを禁止された」⁷⁵。他の教科書を含めて、アルバニア在住セルビア人の推計値と居住地の紹介とあわせて、彼らが少数民族としての権利を認められていないことが強調されている⁷⁶。

(二) ハンガリー

ハンガリーのセルビア人は少数民族として位置づけられ、セルビア語の学校や教科書も存在する。二〇一一年の国勢調査結果によれば⁷⁷、ハンガリーには一万〇〇三八人のセルビア人が居住している。

クレットの地理教科書では、次のように紹介されている。「セルビア人の大移住後、現在のハンガリー地域にセルビア民族が移り住んだ。現在、この国には約四〇〇〇〇人のセルビア人が、主としてセゲドとブダペシュトに暮らしている」⁷⁸。また、移民問題と関連づけてセンテンドレの紹介があり、「ブダペシュトの北西二〇キロほどのところにセンテンドレ市がある。この地域に一七世紀から一八世紀にかけて約八〇〇〇ものセルビア人の家族が移り住んだ。一七二〇年の記録ではセンテンドレ住民の多数派はセルビア人であり、その比率は八八％に達していた。現在、セルビア人は一％にも満たない住民の少数派となっている。センテンドレは歴史上の移民の過程でセルビア人が大量に移り住んだもつとも北に位

置する都市である」⁷⁹とされている。一方、ダータ・スタトゥスの地理教科書では「現在、彼ら〔セルビア人〕は主としてセルビアとハンガリーの国境沿いの地域とブダペシュト近郊に住んでいる。セゲドとその近郊には、二〇〇〇人を超えるセルビア人がいる。二〇一一年の国勢調査によれば、ハンガリーには約一万人のセルビア人が暮らしている。彼らは少数民族として認められ、いくつかの学校でセルビア語による教育を受けることができる。その伝統は非常に活発な数多くの文化・芸術団体の活動によって維持されている。ハンガリーのセルビア人は自らの週刊紙その他の定期刊行物を発行し、ハンガリー国営テレビでの放送やセルビア語のラジオ番組を持っている。ブダ主教区はハンガリーにおけるセルビア人コミュニティのアイデンティティの保持に大きく貢献している」⁸⁰と、かなり詳しく説明されている。

(三) ルーマニア

ルーマニアのセルビア人も少数民族として位置づけられ、セルビア語の学校や教科書も存在する。二〇一一年の国勢調査結果によれば⁸¹、ルーマニアには総人口の〇・〇九％、二万八〇七六人のセルビア人が居住している。二〇〇二年の国勢調査では二万二五六一人であったことから⁸²、大きく減少していることがわかる。

クレットの地理教科書では、次のように紹介されている。「ルーマニアには他の少数民族と同じすべての権利を持つ約二万二〇〇〇人のセルビア人が暮らしており、もつとも数が多いのはティミショアラとその近

郊である」⁸⁶。一方、データ・スタトゥスの地理教科書では「ルーマニアには約一万八〇〇〇人のセルビア人が暮らしているが、この数値はルーマニア人の同化によって恒常的に減少している。彼らの多くが農村部に暮らしており、住民は伝統的に農業に従事してきた。彼らは少数民族として認められ、ルーマニアにおけるセルビア人の学校教育の長い伝統のおかげで、その多くがセルビア語を話す。ルーマニアにおけるセルビア人コミュニティは非常に活発である。セルビア人の文化と習慣は数多くの文化・芸術団体や図書館、セルビア語の劇場の活動によって保持されている」⁸⁴と、かなり詳しく述べられている。

(四) ブルガリア

セルビアに隣接する国々の中で、ブルガリアは唯一「地域のセルビア人」の対象となっていない国である。二〇一〇年にはブルガリアで初めて「セルビア人協会」が結成され、「ディアスポラ省の支援を受けて、セルビア人を結集させ、この隣国のセルビア人の民族的、言語的、宗教的、文化的、精神的アイデンティティを維持、強化、発展させることに取り組んでいる」ことが伝えられたが⁸⁵、法律上の位置づけは変わっていないと思われる。

クレットの地理教科書では、次のように紹介されている。「ブルガリアは少数民族の存在を認めておらず、その領土にどのくらいの数のセルビア人が暮らしているのかを確定するのは難しい。この国では、彼らは主として国境近くの地域におり、約二万人に達すると推定されてい

る」⁸⁶。一方、データ・スタトゥスの地理教科書では「推計では、ブルガリアには約一〇〇〇人のセルビア人が、主としてセルビアとブルガリアの国境沿いの地域とソフィアに暮らしている」⁸⁷とされており、推計値には相当の開きがある。

むすびにかえて

本稿を通じて、セルビアの地理教科書には「ディアスポラと地域のセルビア人」、すなわちセルビア国外のセルビア人に関する詳しい記述があることが確認された。もとより、歴史教科書においては現在のセルビアに限らず、広くセルビア人の歴史が描かれているが、「ディアスポラと地域のセルビア人」についてまとめて記述するものもある。むしろ、それはセルビア国外のセルビア人との結びつきを重視するセルビア政府の方針を反映しており、児童生徒への意識づけになっていると考えられるが、実際の教育現場でどの程度の効果があるのかは、判断が難しい。また、クロアチアの教科書におけるセルビア人に関する記述と比較すると、地理教科書にはセルビア人がほとんど描かれておらず、また歴史教科書では一九九〇年代の紛争における「反乱」の担い手として否定的に描かれる面があることが判明した。セルビアの地理教科書も歴史教科書もクロアチア人のセルビア人を被害者として位置づけているのは対象的である。さらに、クロアチア以外の近隣諸国においても、法的地位はともかく、セルビア人は各国で少数民族として存在するが、地理教科書

には人口データ程度しか記載されることが多く、敵対的ではないまでも無関心であるように見える。

一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけてたびたび指摘されてきたセルビアとクロアチアの歴史教科書における自民族中心的な立場からの認識の違いは、「歴史家対話」等の試みを通じて、また各国のカリキュラム改訂によって、ある程度まで改善されたとはいえ、なお隔たりのある部分も少なくない。本稿でも、なお埋めがたい認識の違いが確認された。両国の政治的和解のプロセスが十分に進まない中で、地理教科書にせよ歴史教科書にせよ、学校教育の場において紛争を通じて悪化した国民感情の克服に貢献できるような、いつそこの教科書改善の努力が必要であろう。

注

- 1 バルカン諸国における歴史教科書をめぐる問題については、日本でも柴宜弘編『バルカン史と歴史教育―「地域史」とアイデンティティの再構築』（明石書店、二〇〇八年）をはじめとする先行研究が少なくない。
- 2 教科書出版社は、BIGZ (BIGZ školsvo)、データ・スタトゥス (Data Status)、エドゥッカ (Eduka)、フレスカ (Freska)、ゲルンディウム (Gerundium)、クレット (Klett)、クレアティヴニ・ツェンタル (Kreativni centar)、ノヴィ・ロゴス (Novi Logos)、ガイッチ (Školski servis Gajic)、ヴルカン (Vulkan izdavaštvo)、教科書局 (Zavod za udžbenike) の一社。なお、ガイッチは五年生向けのみ、フレスカは五年生向けと六年生向けのみ、データ・スタトゥスは六年生向け、八年生向けのみ刊行しているほか、ヴルカンは五年生向けを二

種類刊行している。セルビア教育・科学・技術開発省 (Ministarstvo prosvete, nauke i tehnološkog razvoja) のサイト [https://www.mpn.gov.rs] にある教科書目録を参照。最終閲覧日は二〇二二年一月八日 (以下、全てのサイトの閲覧日も同じ)。

- 3 教科書出版社は、BIGZ、データ・スタトゥス、エドゥッカ、フレスカ、ゲルンディウム、クレット、ノヴィ・ロゴス、ヴルカン、教科書局の九社。教科書局は六年生向けを二種類刊行している。セルビア教育・科学・技術開発省のサイトにある教科書目録 (前掲) を参照。
- 4 『中学校用教科書目録 (令和3年度使用)』 (文部科学省、二〇二〇年) を参照。

なお、現在のクロアチアでは地理教科書が各学年三〜五種類、歴史教科書が各学年四〜五種類出版されているが、これは二〇〇〇年代半ばに教科書が急増した時期があり、原則として事前調査において採択率三位までのものしか学校での使用を認めないという規制を設けた結果であり、一時期よりは減少している。クロアチア科学・教育省 (Ministarstvo znanosti i obrazovanja) のサイト [https://mzo.gov.hr/] にある教科書目録を参照。

- 5 ユーゴスラヴィア紛争に関連して、柴宜弘は「クロアチア内戦とボスニア内戦は、基本的には『セルビア人問題』とすることができると述べている (柴宜弘「ユーゴスラヴィア現代史」岩波書店、一九九六年、一六九頁)。また、ここでいう「セルビア人問題」は、「国内に強く独立に反対するセルビア人が多数居住しているか否かの問題」と定義されている (柴宜弘編『バルカン史』山川出版社、一九九七年、三七四頁)。
- 6 *Nacionalni sastav stanovništva SFRJ Jugoslavije po naseljima i opštinama*. Knjiga 1, Beograd: Savezni zavod za statistiku, 1991, p.12.
- 7 佐原徹哉「ボスニア内戦―グロバリゼーションとカオスの民族化」有志舎、二〇〇八年、九八〜九九頁。

- 8 この時期のディアスポラの役割については、定形衛「旧ユーゴ紛争とディアスポラ問題―クロアチアとコソヴォを事例に」『名古屋大学法政論集』二二四号、二〇七―二三七頁が詳しい。この論文では、「旧ユーゴの体制転換、紛争過程において、政治的、財政的、軍事的貢献において多大な役割を果たした」（二〇八頁）ことを前提として、クロアチア人ディアスポラとアルバニア人ディアスポラについて詳しい分析がなされている。なお、クロアチアでは「クロアチア共和国に居住地を持たないクロアチア国民」に選挙権が付与されており、彼らをディアスポラと呼ぶことがあるが、その場合にはディアスポラの大多数はボスニア・ヘルツェゴヴィナのクロアチア人である。
- 9 Ustav Republike Srbije, *Službeni glasnik Republike Srbije*, br. 98/2006. これと同様の条文は、一九九〇年に制定されたクロアチア共和国憲法にもある。「クロアチア共和国は外国に居住または滞在する自らの国民 (*državljanin*) の権利と利益を保護し、彼らと祖国の関係を促進する。他国におけるクロアチア民族の活動には、クロアチア共和国による特別の配慮と保護が保証される」(第一〇条)。Ustav Republike Hrvatske, *Narodne novine*, br. 56/1990. 同じく、一九九一年に制定されたマケドニア共和国憲法には「共和国は近隣諸国のマケドニア民族構成員とマケドニアからの移民の地位と権利を保護し、彼らの文化的発展を助け、彼らとの関係を促進する。共和国は国外の共和国市民 (*građanin*) の文化的、経済的、社会的権利を保護する」という条文 (第四九条) がある。
- Ustav na Republika Makedonija, *Služben vesnik na Republika Makedonija*, br. 52/1991.
- 10 Zakon o dijaspori i Srbima u regionu (*Službeni glasnik RS*, br. 88/2009).
- 11 *Strategija očuvanja i jačanja veza matične države i dijaspore, kao i matične države i Srba u regionu*, Beograd: Ministarstvo vera i dijaspore, 2011.
- 12 Ministarstvo spoljnih poslova, Uprava za saradnju sa dijasporom i Srbima u regionu. [https://www.djaspورا.gov.rs/]
- 13 定数四五名。ディアスポラとして、アメリカ合衆国代表四名、ドイツ代表四名、オーストラリア代表三名、スイス代表三名、オーストラリア・ニュージーランド代表三名、カナダ代表二名、フランス代表二名、スウェーデン代表二名、イギリス代表二名、中南米代表一名、ベネルクス代表一名、デンマーク代表一名、イタリア代表一名、ノルウェー・フィンランド・アイスランド代表一名、ロシア・ウクライナ・ベラルーシ代表一名、ポーランド・チェコ・スロヴァキア・ラトヴィア・エストニア・リトアニア代表一名、スペイン・ポルトガル代表一名、ギリシア・ブルガリア・キプロス代表一名、トルコ・近東諸国・アラブ首長国連邦・クウェート代表一名、中国・アジア諸国代表一名、南アフリカ・アフリカ諸国代表一名。地域のセルビア人として、ハンガリー、ルーマニア、スロヴェニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、モンテネグロ、(北)マケドニア、アルバニア各一名 (「ディアスポラと地域のセルビア人に関する法律」第一八条による)。
- 14 Narodna skupština Republike Srbije. Odbor za dijasporu i Srbe u regionu. [http://www.parlament.gov.rs/]
- 15 Pravilnik o izmenama o Pravilnika o nastavnom planu i programu osnovnog obrazovanja i vaspitanja, *Službeni glasnik Republike Srbije, Prosvetni glasnik*, br. 9/2006.
- 16 Srboljub Stamenković et al., *Geografija za 8. razred osnovne škole*, Beograd: Zavod za udžbenike, 2011, pp.88-95; Vinko Kovačević et al., *Geografija 8. Učbenik za osmi razred osnovne škole*, Beograd: Klett, 2010, pp.152-155.
- 17 Lilijana Živković et al., *Geografija za osmi razred osnovne škole*, Beograd: Freska, 2013, pp.202-215
- 18 Pravilnik o programu nastave i učenja za osmi razred osnovnog obrazovanja i

- vaspitanja, *Službeni glasnik Republike Srbije. Prosvetni glasnik*, br. 11/2019.
- 19 Marko V. Milošević, *Geografija 8. udžbenik za osmi razred osnovne škole*, Beograd: BIGZ školstvo, 2021, pp.212-224.
- 20 Jelena Milanović et al., *Geografija 8. Udžbenik za osmi razred osnovne škole*, Beograd: Data status, 2021, pp.174-189.
- 21 Kristina Dorđević, *Geografija 8: udžbenik za osmi razred osnovne škole*, Zagreb: Eduka, 2021, pp.265-275.
- 22 Nenad Živković et al., *Geografija za osmi razred osnovne škole*, Beograd: Gerundijum, 2021, pp.180-189.
- 23 Tanja Plazinić, *Geografija 8. Udžbenik za 8. razred osnovne škole*, Beograd: Klett, 2021, pp.198-209.
- 24 Dragana Milošević et al., *Geografija 8. Udžbenik za osmi razred osnovne škole*, Beograd: Kreativni centar, 2021, pp.238-256.
- 25 Dejan Šabić et al., *Geografija 8. Udžbenik za osmi razred osnovne škole*, Beograd: Novi Logos, 2021, pp.216-225.
- 26 Dragana Milošević et al., *Geografija 8: udžbenik za osmi razred osnovne škole*, Beograd: Vulkan izdavaštvo, 2021, pp.255-260.
- 27 Milka Bubalo Živković et al., *Geografija 8: udžbenik za osmi razred osnovne škole*, Beograd: Zavod za udžbenike, 2021, pp.165-171.
- 28 ノヴィ・ロコス・ヒヴルカンの地理教科書には、ブルガリアのセルビア人に関する記述はなご。
- 29 Tanja Plazinić, *Geografija 8*, pp.204, 210.
- 30 Tanja Plazinić, *Geografija 8*, p.201.
- 31 Aleksandar Todosićević et al., *Istorija 8. Udžbenik sa odabranim istorijskim izvorima za 8. razred osnovne škole*, Beograd: Klett, 2021, p.229.
- 32 Dragana Hadžić et al., *Istorija 8: udžbenik sa odabranim istorijskim izvorima za osmi razred osnovne škole*, Beograd: Data Status, 2021, pp.218-219.
- 33 Milka Bubalo Živković et al., *Geografija 8*, pp.10-11.
- 34 Milka Bubalo Živković et al., *Geografija 8*, p.12.
- 35 Tanja Plazinić, *Geografija 8*, p.22.
- 36 Aslan Pushka et al., *Gjeografija 9*, Prishtine: Libri Shkollor, 2009, p.91; Fehmi Rexhepi et al., *Historia 5*, Prishtine: Libri Shkollor, 2009, pp.108-109; Fehmi Rexhepi, *Historia 9*, Prishtine: Libri Shkollor, 2011, p.179.
- 37 Popis stanovništva, domaćinstva i stanova. Stanovništvo prema državljanstvu, narodnosti, vjeri i materinskom jeziku, *Statistička izveštaja 1469/2012*, Zagreb: Državni zavod za statistiku, 2013, p.11.
- 38 Ibid., p.11.
- 39 大竹秀樹「クロアチアにおける少数民族保護について—欧州審議会加盟との関係において—」『日本福祉大学社会福祉論集』一〇二二号、二〇〇五年、一〇一〜一六頁、材木和雄「クロアチアにおける民族問題とセルビア人の地位—その歴史の変遷と内戦終結後の問題状況」『IPS HU 研究報告シリーズ』四二二〇九年、一一八〜一四三頁、同「クロアチアにおけるセルビア系難民の帰還の障害と住宅問題—失われた公有住宅の居住権—の問題を中心に」『環境科学研究(広島大学大学院総合科学研究科)』4、二〇〇九年、五一〜七五頁、同「セルビアにおける難民の現地社会への統合の進行状況」『環境科学研究(広島大学大学院総合科学研究科)』5、二〇一〇年、四九〜八五頁、同「クロアチアにおけるセルビア人難民の帰還と再統合—雇用問題の側面からの考察」『環境科学研究(広島大学大学院総合科学研究科)』6、二〇一一年、九〜三八頁、山川卓「マイノリティ保護のクロアチア政治史—ネイション化とヨーロッパ化の弁証法—」晃洋書房、二〇一九年等。

- 40 Tanja Plazinić, *Geografija* 8, p.201.
- 41 Tanja Plazinić, *Geografija* 8, p.201.
- 42 Dejan Šabić et al., p.219.
- 43 Dragan Milošević et al., *Geografija* 8, p.245
- 44 Uroš Miliwojević et al., *Istorija* 8: *učbenik sa odabranim istorijskim izvorima za osmi razred osnovne škole*, BIGZ školsvo, 2021, p.160. (この教科書では、ほぼ同様の説明が繰り返されているほか (p.145) ‘ヤセノヴァンの「死の収容所」の写真と解説 (p.161) ‘その土地に戦後にさかいて設置された「石の花」のキリル文字への写真と解説が掲載されている (p.159)。
- 45 Uroš Miliwojević et al., *Istorija* 8, pp.247-248.
- 46 Aleksandar Todosijević et al., *Istorija* 8, p.219.
- 47 Aleksandar Todosijević et al., *Istorija* 8, p.221.
- 48 *Narodne novine*, br. 7/2019 (22.1.2019.), Odluka o donošenju kurikuluma za nastavni predmet Geografije za osnovne škole i gimnazije u Republici Hrvatskoj.
- 49 Danijel Orešić et al., *Gea 2, učbenik geografije u šestom razredu osnovne škole*, Zagreb: Školska knjiga, 2020, p.102.
- 50 Danijel Orešić et al., *Gea 2*, p.101.
- 51 Danijel Orešić et al., *Gea 3, učbenik geografije u sedmom razredu osnovne škole*, Zagreb: Školska knjiga, 2020, pp.15, 136
- 52 *Narodne novine*, br. 27/2019 (20.3.2019.), Odluka o donošenju kurikuluma za nastavni predmet Povijest za osnovne škole i gimnazije u Republici Hrvatskoj.
- 53 Krešimir Erdelja et al., *Klio 8: učbenik povijesti u osmom razredu osnovne škole*, Zagreb: Školska knjiga, 2021, p.99.
- 54 Krešimir Erdelja et al., *Klio 8*, p.175.
- 55 Krešimir Erdelja et al., *Klio 8*, p.192.
- 56 Krešimir Erdelja et al., *Klio 8*, p.198.
- 57 Popis prebivalstva, gospodinjstev in stanovanj, Slovenija, 31. Marca 2002, *Statistične informacije*, št. 92/2003, Ljubljana: Statistični urad Republike Slovenije, 2003, pp.5-6.
- 58 Tanja Plazinić, *Geografija* 8, p.202.
- 59 The General Framework Agreement for Peace in Bosnia and Herzegovina, Initialed in Dayton on 21 November 1995 and signed in Paris on 14 December 1995. Organization for Security and Co-operation in Europe (OSCE) [https://www.osce.org/files/documents/e/0/126173.pdf]
- 60 *Popis stanovništva, domaćinstva i stanova u Bosni i Hercegovini, 2013: Rezultati popisa*, Sarajevo: Agencija za statistiku Bosne i Hercegovine, 2016, p.54.
- 61 Tanja Plazinić, *Geografija* 8, p.200.
- 62 Čedomir Crnogorac et al., *Geografija za 9. razred osnovne škole*, Istočno Sarajevo: Zavod za učbenike i nastavna sredstva, 2011, p.134.
- 63 *Narodne novine*, br. 7/2019 (22.1.2019.), Odluka o donošenju kurikuluma za nastavni predmet Geografije za osnovne škole i gimnazije u Republici Hrvatskoj.
- 64 Danijel Orešić et al., *Gea 3*, p.102.
- 65 Krešimir Erdelja et al., *Klio 8*, p.184.
- 66 Popis stanovništva, domaćinstava i stanova u Crnoj Gori 2011. godine, *SAOPŠTENJE / RELEASE*, Broj / No: 83, 12. 07. 2011. godine, Podgorica: Zavod za statistiku Crne Gore – MONSTAT, 2011., pp.6-9.
- 67 Tanja Plazinić, *Geografija* 8, p.200.
- 68 *Census of Population, Households and Dwellings in the Republic of Macedonia, 2002. Final Data, Book XIII, Total Population, Households and Dwellings, According*

- to the Territorial Organization of the Republic of Macedonia, 2004*, Skopje: State Statistical Office, 2005, pp.34-35.
- 70 Tanja Plazinić, *Geografija 8*, p.202.
- 71 Tanja Plazinić, *Geografija 8*, p.202.
- 72 Dragan Vasileski et al., *Nacionalna geografija za II godinu reformirano gimnazijsko obrazovanje*, Skopje: Prosvetno delo, 2016, p.99.
- 73 *Population and Housing Census 2011*, Tirana: INSTAT, 2012, p.71.
- 74 Tanja Plazinić, *Geografija 8*, p.202.
- 75 Tanja Plazinić, *Geografija 8*, p.203.
- 76 Jelena Milanović et al., *Geografija 8. Udžbenik za osmi razred osnovne škole*, Beograd: Data status, 2021, p.182.
- 77 2011. ÉVI NÉPSZÁMLÁLÁS: 9. Nemzetiségi adatok, Budapest: Központi Statisztikai Hivatal, 2014, p.130.
- 78 Tanja Plazinić, *Geografija 8*, p.203.
- 79 Tanja Plazinić, *Geografija 8*, p.103.
- 80 Jelena Milanović et al., *Geografija 8*, p.181.
- 81 Rezultatele finale ale Recensământului din 2011 - Tab8. Populația stabilă după etnie – județe, municipii, orașe, comune. Institutul Național de Statistică. [http://www.recensamantulomania.ro/rezultate-2/]
- 82 Recensământul Populației și al Locuințelor 2002. Tab40. Populația după etnie - regiuni, județe și medii. Institutul Național de Statistică. [https://insse.ro/cms/files/RPL2002INS/vol1/tabele/40.pdf]
- 83 Tanja Plazinić, *Geografija 8*, p.203.
- 84 Jelena Milanović et al., *Geografija 8*, p.181.
- 85 Одржана оснивачка скупштина Удружења Срба у Бугарској, Београд, 17. мај 2010. Влада Републике Србије [https://www.srbija.gov.rs/vest/131870/odrzana-osnivacka-skupstina-udruzenja-srba-u-bugarskoj.php]
- 86 Tanja Plazinić, *Geografija 8*, p.203.
- 87 Jelena Milanović et al., *Geografija 8*, p.182.